ことばの力をはぐくむ学校　研究通信　Vol. 3

KEEP GOING

文責　樋口綾香（研究推進）

6/7月号
2025.7.2

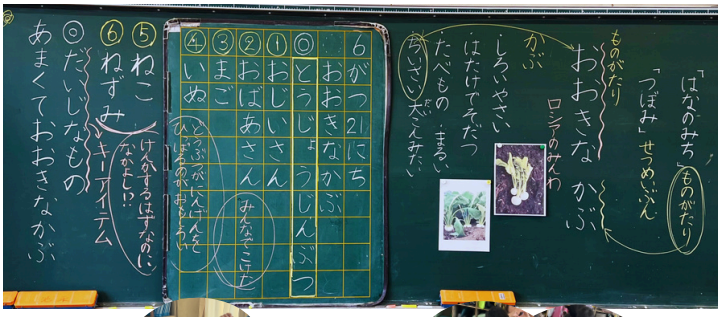
今回は、1年生の国語授業の様子をご紹介します。

１年：「おおきな　かぶ」（文学）ー音読劇をしようー

「かぶって何か知っている？」

「白い野菜」「畑で育つ」「丸い食べ物」など、かぶを知っている子がたくさんいて驚きました。「どれぐらいの大きさかな？」と聞くと、「小さい」と答えてくれたので、電子黒板でかぶを育てている畑の様子や実際の大きさを見ました。そして題名に着目し、「普通のかぶとくらべて、どれぐらい大きいだろう？」と聞くと、「これぐらいかな？」とみんな腕を広げて考えていました。

お話の中で、ねこがねずみを呼びにいくところには、「けんかするはずなのになあ」と子どもたちは不思議顔でした。

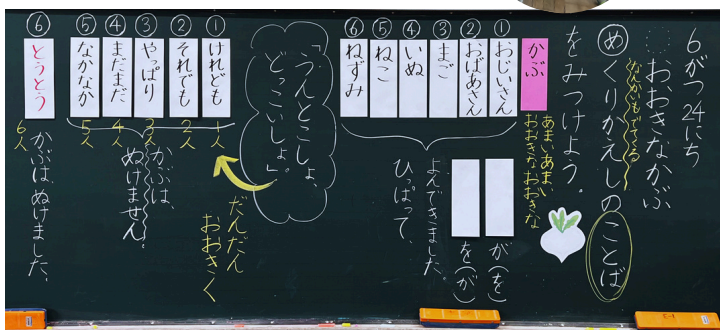


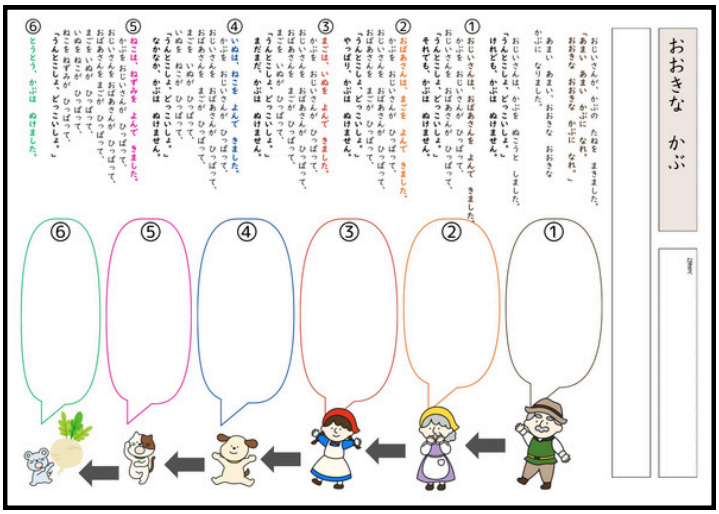
お話の中で、くり返されていたのは、どんな言葉かな？

音読をして、繰り返されている言葉に気づく学習です。小学校低学年の文学教材は、「くり返し」と「比較」が重要なポイントです。同じように書かれている部分を比べ、違いに気づくことが大切です。

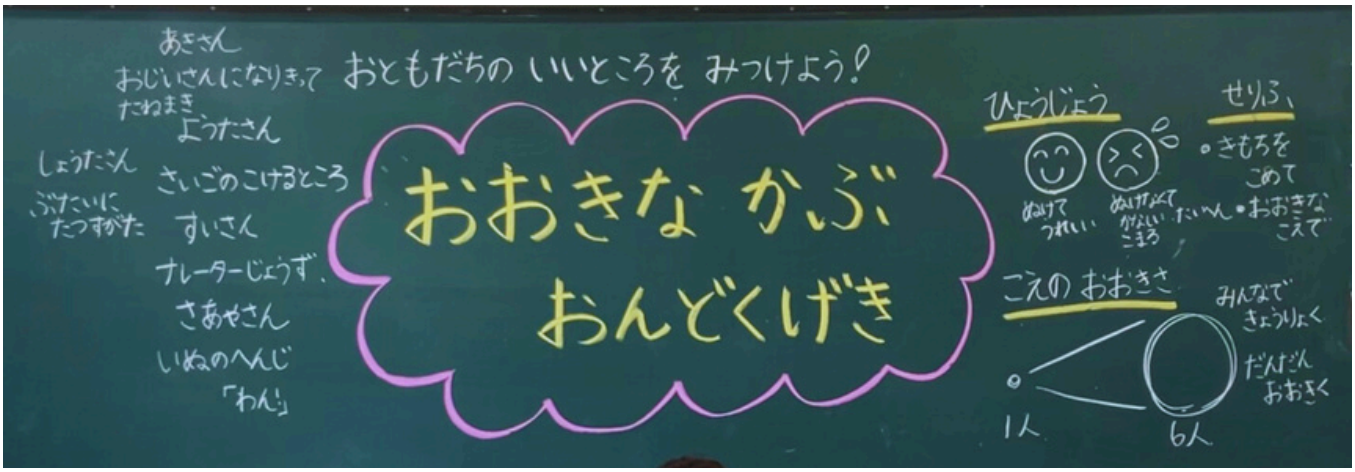
子どもたちは、すぐに「おじいさん」「おばあさん」などの登場人物や、「うんとこしょ、どっこいしょ。」というせりふ、「～を～がひっぱって」「～が～をよんできました。」「かぶはぬけません。」といった文がくり返されていることにも気づきました。

子どもたちが気づいた「くり返しの言葉」を板書に分かりやすく示しながら、次は「違っていること」にも目を向けていきます。「うんとこしょ、どっこいしょ。」を言っている人数の違い、「かぶはぬけません」の接続語の違い、「けれども」「それでも」「やっぱり」「まだまだ」「なかなか」と「とうとう」との違い。「同じかな？違うかな？　何が違うのかな？」と問いかけることで、子どもたちは「言葉による見方・考え方（国語科の本質）」を働かせて想像を広げながら読むことができるようになっていきます。





↑くり返されている言葉を手がかりにしながら、登場人物のオリジナルのせりふを考える学習をしました。「ねこは何といってねずみを呼んできたのかな」というと、「ぼくを食べないでね」「チーズくれる？」とかわいらしいせりふを考えていました。



音読げきって何だろう。

音読しながら、登場人物になりきって動いたり、せりふを言ったりすることだよ。

じゃあ、グループで練習をしよう！

お友だちのいいところは、見つかった？

1時間の練習を経て、いざ本番。舞台となる黒板前に立った班の子どもたちは、堂々と「今から、音読劇を始めます」と声をそろえてあいさつ。観覧席から大きな拍手が送られると、子どもたちは舞台脇へさっと移動し、ナレーターの音読から物語が始まりました。おじいさんになりきって腰を曲げながら種まきをする演技、かぶを抜こうとして重たすぎる様子を「おっとっと」「重いなあ」とつぶやきながら表現する姿に、思わず笑みがこぼれました。せりふの言い回しや動きに工夫をこらしながら、子どもたちは登場人物の気持ちを想像し、自分の声で伝えようとする姿が見られました。

本文を音読しながら動きやせりふを加えることで、子どもたちは「読むこと」を手がかりに物語の面白さにどんどん入り込んでいきます。音読劇は、ただ台本を読むのではなく、読むことを軸に「演じる」「伝える」「協力する」楽しさがぎゅっとつまった学習活動なのだと改めて実感しました。

授業の最後に、「友だちのいいところは見つかった？」と聞くと、たくさん手が挙がりました。どの子も、友だちの音読や演技をしっかり見ていたことが伝わってきました。互いのよさを見つけ合い、認め合う経験を通して、子どもたちの中に「読むこと」への前向きな気持ちが芽生えたように思います。